

# 平成 29 年度 定年退職教員送別懇談会

2018 年（平成 30）3 月 12 日（月）

東工大蔵前会館 くらまえホール



受付の様子



懇談会の様子



河内宣之の発起人（左）から記念品を受け取る三島学長（右）

2018 年 3 月 12 日（月）に“くらまえホール”で定年退職教員送別懇談会が開かれ、懇談に先立ち、学長の挨拶、記念品贈呈、定年退職教員の挨拶がありました。司会は、高田十志和 送別懇談会 発起人が務めました。退職予定の 22 名のうち、14 名の先生方及び退職予定の理事・副学長 4 名、合わせて 18 名にご出席いただき、お一人約 3 分で思いを語っていただきました。概要を以下に記します。

文責：博物館 資史料館部門 広瀬茂久

写真：広報・社会連携課



岡 眞（理学院）

（岡先生には申し訳ありませんが、音声資料が途切れていますので、写真のみとさせていただきます）



柴田 利明（理学院）

素粒子物理学の実験、特に陽子と中性子のスピン構造を研究しています。世界の各地にある粒子加速器を用いて国際共同研究をしています。国際共同研究には世界のいろいろな大学・研究所が集まっており、東工大グループがどのような特徴を出すのかが常に課題です。◆私は日本の大学の大学院を修了した後に、ドイツの大学に就職し、9年間ほど勤務しました。ヨーロッパではボローニャ大学が歴史が長いですが、パドヴァ大学は創設年（1222.9.29）の記録があり、現在、創立800年に近づいています。私が勤めたドイツのハイデルベルク大学は14世紀に創設された大学で、私の在職中に創立600年を迎えました。◆日本の大学は、百数十年前、明治の初期に創設されたので、新しい大学といえます。世界の多くの大学の中で、東工大も新しい大学としてどのような特徴を出し、それを生かしていくかが課題であると思います。◆私は東工大に25年間勤務しましたが、本年4月からは日本大学理工学部物理学科に勤めて、教育・研究を続けます。東工大の一層の発展を期待します。



木村 康治（工学院）

大学院の学生時代に大学教員という仕事に関心を持ち始めました。無形の見えないものを伝えるのが大学教育の役割だと思いました。私もそういう役割を担いたいと思った次第です。幸い望みがかなって、この地で学生時代を含めて47年間が経過しました。多くの学生のみなさんの前で一緒に授業をすることや研究室でディスカッションすることが何よりも楽しく新鮮で、興味が尽きませんでした。恩師となる先生方・先輩・同僚・仲間・研究室のスタッフと一緒にこの長い期間を楽しく、そして充実して過ごすことができ大変幸せでした。感謝に堪えません。最後に本学の将来に対する私の夢と希望を述べさせていただきます：「東京工業大学は教育研究の最高の場である；教育研究に没頭するなら東工大だ！」という評判が国内外で定着し、国際的な合言葉は「東工大へ行こう！」になることを願っています。



中村 春夫（工学院）

昭和46年（1971）に入学し、学部からずっと「破壊と事故防止」の研究をしてきましたが、40歳になった頃からそれだけでは物足りなくなって、学科と専攻に対して「哲学」を勉強させてほしいと申し出ました。「工学に表れる弁証法を10年かけてやってみたい」と相談したところ、「是非やってくれ」と快諾を得ました。今と違って、業績の数や獲得した研究資金の額をとやかく言わない雰囲気だったお陰と思います。プラトン、アリストテレスからズーッと時代を追って哲学を勉強して西田哲学まで来て、現代のものづくりに哲学の弁証法がどのように表れているかということをも丹念に検証しました（詳細は『東工大クロニクル』522号）。40歳ごろから「事故は歴史の表現なのではないか」と思い始めて研究に着手したわけですが、最近になってようやく「弁証法を導入することによって、日本はますます発展していく」ということを確信できるようになりました。JR西日本の“のぞみ”の亀裂が問題になっていますが、そのワーキンググループの主査を務めていて、そこで本学で得た知見を活かしています。東工大以外だったら恐らく工学分野で弁証法を勉強させてくれるところはなかったと思います。このように創造的なチャレンジに温かい場を提供するとともに、ものづくりと汗水を垂らすということを尊重している大学は世界中を見回してもあまりありません。そこで働けたことを誇りに思います。東工大の益々の発展を祈念致しております。



松澤 昭（工学院）

25年間民間に勤務し、15年前に50歳で東工大にきました。研究では60 GHz（高周波数）ミリ波無線通信の実現を目指して、安藤理事・副学長と共にプロジェクトを推進し実用に近づけることができました。初期の頃は毎秒数Gビットでしたが最近では100 Gビット/secという超高速データ転送を実現しています。大学では高い目標を掲げ、長い時間をかけてでもその実現をめざせるところ（息の長い研究ができるところ）にその良さがありますが、実際にそのような経験ができ幸せです。私たちの成果が、今後実用化される5G（第5世代移動通信システム）などのICT社会インフラに使用されることを期待しています。◆教育としては三島学長が進められた教育改革に巻き込まれて結構大変だったのですが、これも一つの成果となって（戦後の和田改革以来）70年ぶりというめったにない大学改革に主体的に関わることができ、いい経験になりました。私は東工大ではなく東北大の出身ですが、東工大にきて全くストレスがない人間関係を享受させて頂きました。非常に開かれた素晴らしい大学だと思っています、これからもこの良き伝統を守りながら世界屈指の理工系大学に発展して行って欲しいと願っています。



伊東 章（物質理工学院）

物質理工学院というよりは旧化学工学専攻・化学工学科といった方が分かりやすいでしょうか。25年間新潟大学にいてすっかり新潟人になりましたが、最後に9年間こちらに縁がありまして定年を迎えることができ大変ありがたく思っています。大岡山の研究室に座っていると出版社の編集者が回ってきて「先生何かいい本のネタありませんか？」と言うものですから、授業のテキストなどをまとめて7冊も（膜分離工学等に関連した）本を出すことができました。これも大岡山に来られたお陰だと感謝しています。益々の東工大の発展をお祈りします。



篠崎 和夫（物質理工学院）

学部からずっと東工大で、ドクターを出した後5年間 電気会社に勤め、そのあと大学に戻りましたので教員になって32年です。15年ぐらい前から大学の教育の部分に参加させてもらい、最後の数年は教育改革に深く関わりました。また、教育革新センター、学生支援センターの副センター長として、組織の立ちあげに携われたのは、大変幸せで楽しい日々でした。私自身は、少し子供っぽいのですが「楽しくなければ研究じゃない！」と学生に常に言い続けていまして、ある時大学の教員をしている卒業生から「私が学部生の時に先生からその言葉を聞き、すごく印象に残っています」と言われて嬉しく思いました。今後とも是非 東工大をよくして頂ければと思います。



小島 定吉（情報理工学院）

1987年の8月に東工大の情報科学科へ 都立大学の数学科から移ってきました。それ以来30年と8ヶ月、カビの生えるような長い期間 お世話になることになりました。専門は 数学のトポロジーという分野ですが、2000年の初めには100年来 未解決だったポアンカレ予想が解かれるという素晴らしいニュースに遭遇するという幸運に恵まれました。情報科学科に在籍していたということで 計算機の環境が非常に良かったので、それを生かしてコンピュータを使って数学をやるという実験数学分野の開拓に取り組み、それなりの成果を収められたのではないかと考えています。こうした私の経験・業績は、同僚・東工大の環境・事務の方々の支援のお陰と感謝しています。



新田 克己（情報理工学院）

22年間 東工大の教員としてお世話になりました。その間に数百回講義をし、先週の金曜日には最終講義をしました。22年間といいますと、私が1期生(最初の学生)を受け入れた時に生まれた学生が今年卒業する計算になり、長い年月といえます。私は毎年毎年新しい学生を受け入れ、教育をして社会に送り出すことを繰り返してきましたが、学生さんの平均年齢は変わらないので、私自身はずうっと年を取らないような錯覚に陥ってきました。学生さんから見ますと40代の時の私と50代の時の私と60代の時の私では全然違ったタイプの教員に見えたに違いありません。◆私が生まれた昭和27年は漫画「鉄腕アトム」の連載が始まった年です。そのアトムに刺激されて人工知能をやりたいと思って研究の道に入り、今日に至っています。これをライフワークにできたということは、子供の頃の夢を追い続けられたということで大変幸せなことだと思います。やっと人工知能が社会でブームになったところで定年を迎えるのは少し残念なのですが、幸いなことに、4月から産総研で研究が続けられる見込みです。長い間有難うございました。



上西 哲雄（リベラルアーツ研究教育院）

11年前に赴任して英語を担当しました。今の気持ちは感謝だけという感じです。これまで2つの私立大学と2つの国立大学を経験して、最後に東工大に在籍しましたが、学生の質が違っていると感じました(決してそれまでの大学の学生は質が悪いというわけではありません)。教育に関する細かな話は『東工大クロニクル』522号に書いておきました；「学生には感謝」という心情です。◆同僚についても先程お話がありましたように、私の場合もストレスがない状況に恵まれ、非常に自由に発言させてもらいました(もしかしたら周囲の方々に嫌な思いをさせていたかもしれませんが)。とにかく皆で何か作っていくという気概が溢れていて非常にいい部局でした。◆研究については職員の方に本当に感謝です。自由にさせていただいたと思います。国立大学の研究活動には制約が多いというのが私のそれまでの経験則でしたが、東工大の事務の方々は、それはできないと門前払いにしないで、何とかしてあげようと親身になって考えて下さいました。◆英文学とりわけアメリカ文学が私の専門ですが、東工大で英語を教えてこられた先輩方にも感謝しなければなりません。東工大に来るまでと来てからでは学会での私の扱いが随分変わり、活躍の場を多く(年に2~3回はシンポジウムの講師を務める機会を)与えてもらえるようになりました。私の努力もさることながらと言いたいところですが、実際には東工大の英文学・人文学の伝統が高く評価されていることの恩恵にあずかったに過ぎません。理工系のトップランナーである東工大は 人社系のトップランナーでもあったわけです。本当にありがとうございました。



佐伯 泰樹（リベラルアーツ研究教育院）

1979年11月1日という中途半端な日付で助手として採用され、工学部一般教育等外国語群英語に所属しました。当時は、「外国語は一般教育ではなく、一般教育等の“等”だ」とさんざん言われまして、ちょっとおかしい気がしたものです。38年と数ヶ月の区切りですので、普通だと名残惜しいとか寂しいという気持ちになるのですが、私はたまたま家内の親も含めてここ数年親の介護と向き合ってきていますので、退職しますと少しは時間的に楽になるのではないかと、少し後ろ向きの理由ですが、センチメンタルにならずにすんでいます。4月からは近隣住民に紛れて、たまに犬の散歩でキャンパスに出入りするかと思います。長い間お世話になり有難うございました。



前川 眞一（リベラルアーツ研究教育院）

専門は心理統計で、理系と文系の間のような領域です。最初に就職したのが研究所でしたので、狭い分野でなんとか後継者を育てたいと思い就活をしまして2001年に東工大にやって来ました。それから何人かの博士を出していますので目的を果たすことができました。専門（教育・社会系心理学）の関係で、ここ数年文科省の会議に引っ張り出されて、最後の頃はかなり忙しい思いをしました。今教育改革や入試改革が大きな話題となっており、数日前には東大が業者テストを使わないと表明していましたが、東工大はこれからどうなるのかなということに思いを馳せつつ、退職させて頂きます。東工大のますますの発展を祈念します。



高橋 実（科学技術創成研究院）

47年前に東工大に入学しましたが、その時は、現在まで東工大にいさせて頂くことになろうとは夢にも思いませんでした。原子力を志したのは大学4年の時です。あらゆる活動の基盤はエネルギーであり、日本は原子力に立脚するしかないだろうと考えたわけです。東工大は早くから原子力に力を入れていました。研究所になる前の原子炉施設の頃から、東工大に研究用の原子炉（TITANという核分裂実験装置）がありました。実際には本稼働することはありませんでしたが、教員スタッフも充実して原子炉工学に関することのほとんどを勉強することができる環境でした。そのお陰で、福島原発事故の際にマスコミなどから質問が多数寄せられましたが、事故を起こした原発の図面等がなくても適切に説明できました。今の高速炉“もんじゅ”や将来の核融合などの長期的なエネルギー問題に対しても真剣に取り組んできました。“もんじゅ”型のナトリウム冷却高速炉に関しては、私は初めは期待していたのですが、その後いろいろと勉強を重ねた結果、新しい方法は別のところにあることに気づき、鉛を冷却材に用いる小型炉方式を提案することができました。東工大に置いていただいたお陰で、大変多くの方々との出会い、経験を重ね、かつ学ぶことができましたことを深く感謝しています。



堀江 三喜男（科学技術創成研究院）

旧精研に所属していました。現在は、フロンティア材料研究所60%、未来産業技術研究所40%の割合で仕事をしています。私が最後の話し手で時間はたっぷりあるので、2つの話をします。一つは学長三島先生との思い出を通してこれからの准教授に寄せる期待、2つ目はこれからの東京工業大学にあってほしいことです。◆三島先生とは旧精研において同じ助教授として在籍し、いろいろお付き合いしました。教授会では、教授と助教授が同席して、だいたい教授の先生方が話を進めていくことが多かったと思います。もちろん中には自分の意見を堂々と言う助教授もいて、それが許されるのが精研のいいところでしたが、それでも助教授だけで気軽な集まりを持たないかということで、毎週昼休みに自分の研究について紹介する会を始めました。助教授だけの会議にすると好き勝手な意見がぼんぼん出てきて、ドキッとするような場面も多々ありましたが大変盛り上がり、いい意味での仲間意識も醸成されたと思います。この助教授の会の名称については三島先生と共に悩みました。先生方は若手とおられるのですが、実際にお顔を拝見するとそうでもない気がしまして、「やや若手会」がいいのではということになり「JaJa若手会」と称することになりました。何でも言っている会なので非常に良かったのですが、この会もやや若手だった先生方が皆教授になり結果的には自然消滅しました。若手の活性化につながると思いますので、すべての部局内でお勧めです。◆2つ目は私のかかなり先輩にあたる名誉教授の先生が、確か機械系の同窓会「白星会」の会報に投稿された記事だったと記憶しています。私が学生の時に何気なく目にし、強く印象に残った話です。その先生が言うには、人間の頭の中にはダイヤモンドが入っていて、その磨き方によって頓知・才智になるのだそうです。頓知というのはダイヤモンドのブリリアントカットには至らず半分ぐらいでたために磨かれた結果で、この磨かれ方だと、飲み会などでは一座の花形になり饒舌だが言っていることにあまり中身がない。完璧に磨かれていない人に備わっているのが才智で、知識があって言うこともしっかりしている印象を受けるが、ほとんどが受け売りで自分の意見が一切ない。これらに対し、人の話をよく聞き意見を求められれば筋道だって簡潔に自分の意見を言える人たらしめるのが才智であると述べ、これこそ東工大卒業・修了生にあるべき姿であると理解しました。◆これにつなげてお話ししておきたいことがあります。すずかけ台に大学院大学を創るときは才智に基づき、行われたと思いますが、今日では既に全国の大学が大学院を充実させていますから、その役割は終わったと考えるべきでしょう。ならば東工大の学生定員を2倍にして、米国のカリフォルニア大学システムのように、すずかけ台校にしてより多くの東工大修了生を社会に送り出し、世界の幸せのために貢献すべきだと思うのです（詳細は『東工大クロニクル』522号参照；文科省が許すかどうかは知恵次第）。これからの東工大にあってほしい姿を語らせていただきました。精研出身の伊賀前学長には「知恵を出すのはいいことだ。しかし知恵だけではだめだ。汗もかけ！」とよく言われました。日々知恵を出しながら、多くの時間を費やしてきましたけれども、あっという間にこの年になり、めでたく退職となりました。



三島 良直 (学長)

昭和 24 年 (1949) 生れで、昭和 44 年 (1969) に東工大に入りました。それ以来、金属材料を中心とした材料の研究をやってきました。修士まで東工大の学生でしたが、その後カリフォルニア大学バークレー校に学位を取りに留学し、ポストクの期間を含めて 6 年間向こうで過ごしました。その後、幸い精密工学研究所に職を得て、今日に至るまで東工大で過ごしました。助手と助教授時代を過ごした精密工学研究所時代が、やはり一番のびのびと昼も夜も学生と一緒に研究をし、野球もやりと本当に楽しく充実した時間だったという思いが込み上げてきます。◆留学の期間は私にとって大きな財産になりました。5 年半前に学長になり、大きな改革をしてきましたが、留学時に経験したアメリカのトップ大学での教育の仕方が非常に強く印象に残っていて、“すべては学生のために”ということ常を念頭に置いて改革にあたってきました。毎年 1000 人強の優秀な学生が難しい試験を突破して入ってきます。彼らをどこまで伸ばしてやるのかということ真剣に考え、先生方の協力のもと、(1) 学生がみずから目標を立てて一生懸命勉強するという雰囲気と仕組みを作ることによって、彼らが研究室に配属される頃にはかなりレベルの高い学生に育っていて欲しい、そして (2) レベルアップした学生に各研究室で進行中の世界トップレベルの研究を体験させることに重点を置いて大学院の教育をしていくべきだろうというのが私の基本的な考え方でした。この改革は、先ほど松澤先生もおっしゃっていましたが、大きな改革でしたので大変な苦勞を教職員の皆様におかけすることになりました。ご協力に心からお礼を申し上げます。教育改革が始まってようやく 2 年経過したところで、この 4 月に 3 期生が入学してきます。システムやカリキュラムを変えただけで教育改革が成功するわけではありませんので、教職員が一体となった意識改革が根付き、それが強力な牽引力となって改革が進展していくことを期待する次第です。



岡田 清 (理事・副学長)

この中で一番年長で、この大学に入学してから 51 年 (半世紀!) になります。その間 学生から始まり、教員になり、最後の 6 年半は 凶らずも執行部として大学を運営していく立場になりました。その場その場で自分から見た世界は変わって見えるということを実感しています。そういう意味ではいろんなことをさせて頂いたがゆえに、今日の私があるのだと感じています。自分は そのように変わったと思っていますが、皆さんからは 変わったようには見えないかもしれません。大学についても同じことがいえるのではないのでしょうか。私が入学した頃の東工大と今の東工大は 全然違います。外見も違いますし 中身も違います。大岡山も変わりましたし、すずかけ台は そもそもありませんでした。しかし その変化は そこにいた人にしか よく分かりません。例えば 今 国立大学が置かれている状況は、法人化されてから毎年お金が減り、本当に大変です。本学はまだいい方でしょう。これだけ国立大学が大変なのに、世の中から「このままでは日本がダメになる。大学にもっとお金を入れろ」という声は聞こえてきません。1 つは 我々がやっていることを地域と社会に対して上手にアピールできていないからではないかと思えます。私も若い頃に 教員として自分の研究で海外の大学に滞在した経験があり、最近では大学運営の立場でいくつかの海外大学を視察しました。特に 私が 30 年前に過ごしたイギリスの大学は、2 年前に訪れたときは、本当に様変わりしているのに驚かされました。それもこれも よく見ると 彼等は 社会に対して自分たちのやっていることをきちんとアピールしているのです。“社会から理解してもらおう”ことが エッセンスだと思います。去るものが課題を残していくのはよくないのですが (立つ鳥跡を濁していきますが)、大学としてはこれから 社会に対して自分たちがやっていることの価値をいかにアピールして サポーターを作るということが すごく大事だと思いますので、来年度から 益先生のもと 一致団結して、社会にも存在価値をより一層理解してもらえる大学にしていって欲しいと思います。長く居過ぎた私の最後の言葉とさせていただきます。



丸山 俊夫（理事・副学長）

今回の三島学長のもとでの改革においては、教育改革を担当しましたが、皆さんのお陰で少し前進させることができました。ご協力にお礼申し上げます。学長の言葉にもありましたように、学生のキャンパスライフが充実し、張り切って勉学にいそむことができる環境を提供したいというのが今回の改革でした。学生たちがこれまで以上に明るい顔をして前向きの日々を送ってくれるようになれば、教職員が一体となって努力した甲斐があったこととなります。◆東工大は昔から研究では世界と競争し高いレベルを維持してきました。しかし最近では、社会がグローバル化し、研究者であってもコミュニケーション力がないと本当の意味での活躍ができない状況になっています。このような変化に対応すべく、今回の改革では専門分野の力をつけることはもちろん、学生のコミュニケーション力の育成にも注力しました。コミュニケーション力というのは英語がうまいという語学力だけではなく、教養的なものをバックに持って外国人たちとも気後れせずに（できれば対等に）お付き合いできる力だと思います。そういう意味でリベラルアーツ研究教育院の先生方には非常に斬新な改革をやっていただいたと感謝しています。◆一方、この5年間を私自身について振り返ってみますと、教育改革を実現するために多くの先生方といろんな形で話をしてきました。それまで私はどちらかという研究ばかりに目を向けてきていたものですから、コミュニケーション力は乏しい方でした。しかし、図らずもこの5年間、毎日のように多くの先生方と意見交換や交渉をしなくてはならなくなったことで多少はコミュニケーション力が付いた気がします（この意味で個人的にも有意義な5年間でした）。定年を迎えた私ですら そうなのですから、若い学生ならば 鍛えればコミュニケーション力は 短期間のうちに急速に伸びると思います。◆学生が研究力とコミュニケーション力（表現する力）の両方を持つということが研究の推進にとっても望ましいと思います。「表現する力」を通して、自分の研究成果をよりよく理解・評価してもらえるようになると、楽しくなり日々の研究により一層力が入るという好循環が生まると期待しています。コミュニケーション力の養成にこだわり過ぎると、「本学の特徴である“研究を通した学生の成長”を妨げるのでは？」と心配される先生方もありましたが、最終的には表現力が伴わないと本当の意味で研究力を発揮し、長期にわたって社会に貢献することはできないと思います。是非 学生の表現力を高めることにも心を砕いていただき、学生が明るい顔をして研究室にやってくる、そして生き生きとして社会に巣立っていくようにして頂きたいと願っています。



安藤 真（理事・副学長）

電気電子工学を志して1970年に入学し、一度日本電信電話公社に10年ほど勤めて、またあこがれの東工大に戻ることができ、今日に至りました。2年前まで教員として、学生と一緒に研究に取り組む中で、学生の潜在能力にずっと驚かされてきました。たまたま最後の3年間、執行部に入って、大学全体の研究のマネジメントをさせていただく過程で、今度は色々な先生方とお付き合いする機会を得ました。東工大の学生が力を持っていることは肌で感じていましたが、この3年間の経験で教員についても大変頼もしく思いました。シニアの先生方が凄いのはもちろんですが、若手教員の中に大変な逸材がいるということに驚かされる日々でした。いろんな方々といろんな立場でお付き合いできたことに感謝しています。東工大の一員であることの誇りと責任を感じて微力ながら努力してきましたが、今後は、三島学長が掲げられた目標「2030年には世界のトップ10入り」が現実のものとなり、その教員であったことを何よりも誇りにできる日の到来を待ち望みたいと思います。私を育て、仕事の場を提供してくれた東工大に感謝。



寺野 隆雄（情報理工学院）

（所用で、少し遅れたために、懇親会での挨拶となってしまいました。学生へのメッセージは『東工大クロニクル』522号をご覧ください。）

本日は、懇談会にお招きいただきどうもありがとうございました。私は、東大・情報工学修士課程を修了して、電力中央研究所で10年強働いたのちに、1990年から筑波大学の社会人向け大学院の教員となって、学術・教育の世界に足を踏み入れました。そして社会人向けの「夜の生活」を続けたのちに、2004年から東工大・総合理工学研究科に勤務させていただいてきました。2004年はちょうど国立大学が法人化された年で、筑波大学と東工大の兼任を続けていたことを覚えています。そして、いつの間にか、ここ、東工大での勤務が一番長いものになっていました。いつも思うのですが、大学の教員は、学生からも、同僚からも常に、新しい知識と刺激とを受けることができる非常に恵まれた職業であると感じています。幸いなことに、産総研との共同プロジェクトのメンバーとして、ここしばらくは大岡山キャンパスのオフィスに通うことになりました。今後とも、新しい刺激を受けて教わる立場でいられるべく努力する所存ですので、よろしく願い申し上げます。